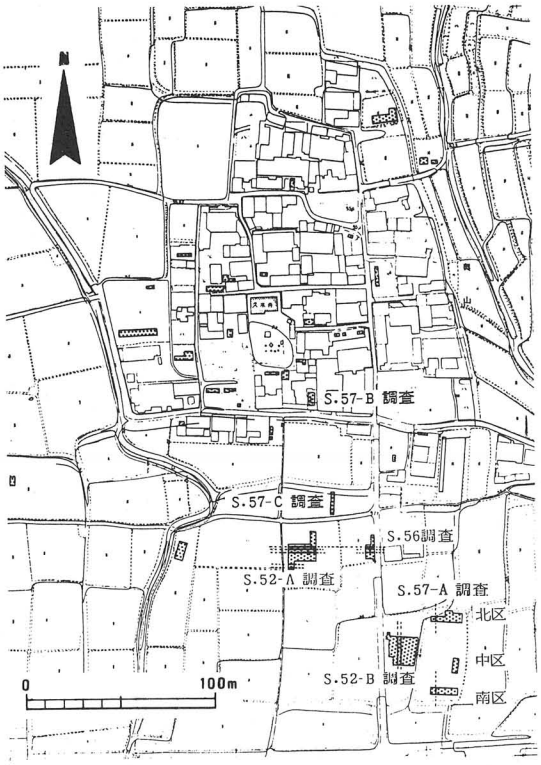
11. 奥山久米寺周辺の調査

（昭和57年８月）

今年度，奥山久米寺周辺では，４ケ所で調査を行なった。ここではＡ調査地について報告する。Ａ調査地は，奥山久米寺塔址の南東約200ｍにあり，昭和52年に，８世紀中頃の土器を含む南北溝ＳＤ130を検出した水田に東接している。調査は，それら奈良時代の遺構の広がりの確認を主な目的として，南北に長い水田に，北・中・南の三調査区を設けて実施した。調査地の層序は，上層から耕土・床土・黄褐色粘質土・暗黄灰色粘質土であり，遺構は暗黄灰色粘質土層上面で検出した。

遺構　北調査区では，南北溝ＳＤ200，掘立柱建物ＳＢ186・187・188・189，土壙ＳＫ191などを検出した。中・南調査区では，ＳＤ200の南延長部分のほか，柱穴，柱根を検出したが，調査範囲も狭く，遺構の存在を確認したにとどまる。

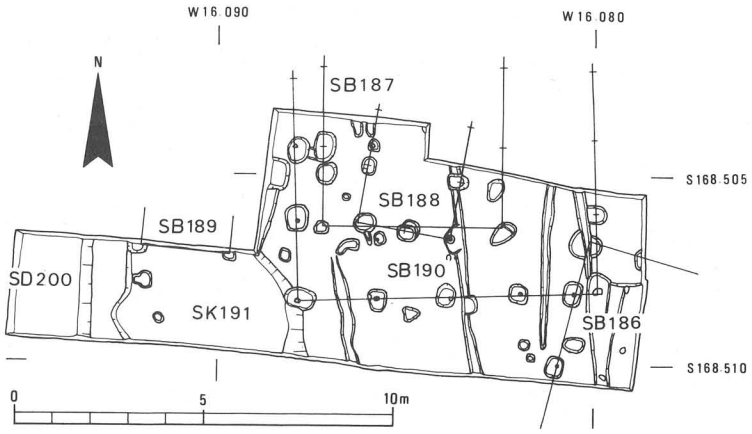
南北溝ＳＤ200は，北・南調査区の西端で検出した素掘り溝で，幅2.5ｍ以上，深さ0.4ｍである。各々で長さ２ｍ余を検出したにすぎないが，両者は一連の溝とみられ，南北40ｍ以上につづくものである。埋土からは，７世紀中葉～後半の土器が出土した。



第34図　奥山久米寺周辺調査位置図（１：4000）

ＳＤ200の東で検出した掘立柱建物群は，建物方位の上から，３つに大別される。ほぼ真北に近い方位をもつＳＢ187は，桁行１間（2.1ｍ）以上，梁行２間（2.4ｍ等間）の南北棟である。北で西へ約2°振れるＳＢ190は，東西４間，南北２間以上の建物で，柱間は東西の両脇間が2.1ｍと広く，中央間は1.9ｍ等間である。南北の柱間も南が2.1ｍ，北が1.9ｍとなっている。柱穴には直径14cm

の柱根を残すものがある。北で東へ大きく振れる建物にはＳＢ186・188の２棟がある。調査区東端で検出したＳＢ186は，東西１間以上，南北２間以上の南北棟で，隅の柱間が1.45ｍと狭く，ほかは1.95ｍである。ＳＢ188は，ＳＢ187と重複する建物で，桁行１間（1.5ｍ）以上，梁行２間（1.2ｍ等間）の南北棟である。ＳＢ187よりも新しい。なお，建物群の西にある土壙ＳＫ191は，柱穴の上を覆う８世紀中頃の土器を含む土層を掘りこんでつくられており，埋土からは，奈良時代後半の土器が出土した。



第35図　北区調査遺構配置図（１：200）

まとめ　今回検出した掘立柱建物群は，その重複関係から，８世紀中頃以前の遺構であり，柱穴出土土器等を考慮すれば，７世紀後半～８世紀前半代を中心とする短期間に造替をくりかえしたものとみられる。この特徴は，昭和52年に検出した奥山久米寺南限付近での所見（概報８）と一致するもので，同寺跡南方には，それらが一体として，奈良時代に中心をおいた建物群が広く営まれていたものとみられる。

南北溝ＳＤ200については，埋土出土土器からその使用年代の一端を７世紀中頃から後半におくことができるが，溝の開削・廃絶の時期は明らかでなく，建物群との関わりも推定の域をでない。ただ，昭和52年にこの西約18ｍの位置で検出した南北溝ＳＤ130は，８世紀中頃の土器を含む溝であり，いま仮りに，両溝を北へ延長すると，先の寺域南限の塀ＳＡ110や，その南の東西道路ＳＦ120と交叉する位置にあり，奈良時代の建物群が，これらの溝で区画されていた可能性がある。なお，ＳＤ200は，藤原京東京極の東約258ｍにあり，藤原京条坊との関わりは認められない。東西道路ＳＦ120についても同様の所見であって，これら奈良時代に存続する藤原京条坊以外の地割については，それらに区画された可能性のある奈良時代の建物群の配置や性格とともに，今後の調査の進展をまって検討したい。